『ため池を活用した，地域の絶滅危惧植物の生息域外保全』

谷口　慶太　　辻本　莉菜　　藤本　波児　　松井　勇斗　　的場　慎太郎
指導教員　田村　統

1　研究の背景と目的

生物多様性は，人間の活動により衰退している。主な原因は　1.自然の過剰な利用　2.自然への関わり合いの減少　3.外来生物や環境汚染　4.地球温暖化現象である。兵庫県も例外ではなくシカやイノシシの増加や里山・ため池・水田の管理不足により，急激に生物多様性が低下している。

このような，生物多様性の衰退の防止と啓発的な活動を目指して，水利権の消失したため池を地域の絶滅危惧植物の生息域外保全の場として活用するとともに，環境教育への活用を目的として「太子町総合公園柳池」で実験を開始した。なお本調査研究活動は，太子町役場まちづくり課の協力のもと「総合公園活用社会実験」の一環として実施している。

2　方法

生きものの移植や移入する場合の問題点として大きく以下の点がある。

Ａ生態学的な問題　**①すでにそこにいる動植物との競争**　**②近縁種との遺伝子汚染**
③自然分布の攪乱
Ｂ維持管理上の問題　**①散水しなくても枯れないか**　**②シカやコイによる食害**
③セイタカアワダチソウのどの除草

以上の問題解決にあたり，柳池周辺の植物相の調査と，移植予定地の植生調査を行った。

3　結果

・113種の自生種の半数近くの53種類が外来植物で，特に保護すべき希少植物は確認できなかった。
・移植予定地の植生調査から，土壌湿度の安定した場所を探し，ノジギク（県Cﾗﾝｸ），フジバカマ（県Aﾗﾝｸ），オキナグサ（県Aﾗﾝｸ），ヒシモドキ（県Aﾗﾝｸ），ミズトラノオ（県Bﾗﾝｸ），マルバオモダカ（県Aﾗﾝｸ）を移植した。ため池の増水時に，ミズトラノオとマルバオモダカは生育不良となった。他の植物は人が灌水することなく活着した。
・シカやコイの食害，盗掘防止のため防獣ネットで移植場所を囲ったところ，特に被害はなかった。
・除草作業などの労力を軽減するために，移植場所を１か所（15m×15m）に限定した。

4　考察

柳池を活用した，絶滅危惧種の生息域外保全は，移植する植物の生育環境と移植場所の土壌湿度などの環境を配慮することで灌水しなくても栽培可能であることが分かった。ため池の水位の調節について太子町担当者と協議することで，ミズトラノオなどの抽水植物も生育できると考えられる。

5　結論

水利権の消失したため池を生息域外保全の場として活用することは可能である。また公園という立地や体験学習施設などを生かした，環境学習の場としての活用方法も考え，調査で撮影した写真を使い，スマートフォン用自然観察ガイド「太子町総合公園の植物図鑑」を制作した。※アプリ制作は明石高校岩崎教諭

来園する幼児・児童の安全性に配慮し，外来植物アメリカオニアザミは早急に駆除する必要性がある。

図鑑用 QR コード

6　参考文献

兵庫県農政環境部自然環境課（2020）「兵庫県版RDB2020（植物・植物群落）」ひょうご環境創造協会
森昭彦（2020）「帰化&外来植物見分け方マニュアル」秀和システム